

日本IT書紀

133 ベンチャー列伝

08 宣試篇
卷之十九 先驅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第百三十三

ベンチャー列伝

一

一九六九年（昭和四十四）までのコンピュータ業界の主な出来事を書いてきた。確認の意味で、重複を承知であえて書くと、

- ・初の汎用コンピュータ「IBMシステム/360」が登場し
- ・富士通が「FACOM230」をシリーズ化し
- ・政策では通産省電子工業課の戸谷深造が大型プロジェクト「超高速電子計算機開発」事業を起し
- ・民間では計算センターやパンチセンター、ソフト会社が相次いで誕生した。
- ・産業界は「MIS」(Management Information System)ブームに沸いていた。

書き忘れたことがあった。というより、書ききれなかつ

た、というのが正しい。

加藤秀俊がいう「中間文化」が形成されると並行して、この時期、コンピュータの利用が急速に進んだのである。別の言い方をすれば、コンピュータの普及が「中間文化」の形成を促した。

また別の言い方をすれば、「中間文化」の形成が新しい産業モデルを生み出した。すなわち大消費時代の到来であった。大消費時代に企業が対応するには、コンピュータが欠かせなかったし、コンピュータがなければ大消費時代はやってこなかったかもしれない。

もう一つは、これから筆者が描こうとする一九六〇年代後半から七〇年代にかけての、新しい産業モデルの形成者たちは、戦後の混乱期が生み出した人々だったということである。言い換えれば戦国時代のように「社会的流動性」が極度に高かった。

彼らはワイリアム・シヨックレーやロバート・ノイスのように突出した才能の持ち主ではなかった。つまり、何か画期的な技術や製品を作ったわけではなかったが、計算機という新しい道具を巧みに使って自らのビジネスを実現していった。

別の表現をすれば彼らは計算機を使うことで自らの不足を補い、「中間文化」を吸収しつつ新しい産業モデルを作

り上げていったのだ。

この国の歴史において、旧来の社会・経済の枠組みががらりと崩壊したことが一度だけある。それは十五世紀中葉から十七世紀の手前にかけて、およそ百年ないし百五十年続いた「戦国」と称される時代である。

声が大きくて腕力の強い多くの馬の骨が大名、小名に成り上がったが、最後には百姓の子倅たちを組織して兵力化することができた者が生き残った。さらにその中から鉄砲という道具を使いこなし、貨幣を手中に収め、土地を政治化することができた者だけが覇を唱えた。

再び繰り返して強調しておかなければならないのは、一九六〇年代後半は大消費時代が始まったときだった、ということである。「中流」の意識を持つ「知識人」であるところの大衆、大衆であるところの知識人が、より文化的、より民主主義的かつ、より自由主義的であろうとして、平準化された商品を競って買い求めた。

ここに産業の構造的な変革が起こった。

それまでの産業は、国（ないし「国家」）のためにあった。まさに「鉄は国家」の時代だった。鉄鋼、造船、自動車、繊維、化学、薬品、電機、機械、商社などは、国家の運営に必要な機能として存在した。ゆえに「サービス」というものには、価値が認められなかった。

ところが大消費時代が到来した結果、商品をマスプロ化すると同時に、「サービス」が重要な競争力になっていった。

例えば花王石鹼の始まりは、一八八七年（明治二十）に長瀬富郎が東京・日本橋に開いた洋物店にさかのぼる。三年後、長瀬二十七歳のとき、国産の石鹼を売り出して現在につながる基礎を築いたが、大きく発展したのはいうまでもなく第二次大戦後である。

その経営理念は、一九四六年十一月三日に公布された日本国憲法の第二十五条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」に裏打ちされている。

のちに同社の情報システム部長を務め、独自の受発注データ交換システム「花王V A N」を構築した小西一生は、「なぜ石鹼メーカーがV A Nなのか」という質問に、次のように答えた。

「どんな山奥、人里はなれた一軒家であろうと、当社の衛生用品を誰もが等しく使うことができるようにすること。それが当社の理念であり、情報システムの目的なのです」レナウンという会社もよく似ている。

そもそものは一九二三年（大正十二）、佐々木八十八が創業した洋品店であって、その社名は創業の前年に日本を訪れたイギリス皇太子の乗艦「レナウン号」に由来している。

第二次大戦のあと、「株式会社佐々木営業部」として再発足したこの会社が、アパレルという産業を起すことができたのは「中間文化」による大消費時代にいち早く適応したためだった。

電通の久本省二とレナウン宣伝部の今井和也が企画し、最初は弘田美枝子、のち由美かおる、シルビー・バルタンが歌うところのテーマソング「レナウン娘」が、一種独特の印象を持つ映像とともに繰り返しテレビから流された。その爆発的な流行で世に出たのが小林亜星、テレビコマースヤルのイラストは、亜星の実の妹・川村みずえが描いた。

松下幸之助もまた、日本国憲法の精神にのっとり、便利で安価な電化製品を供給し続けた。冷蔵庫、洗濯機、炊飯器、ミキサー、ラジオ、テレビ、トースターなどは、政策的に見たとき家庭の主婦の家事労働を軽減することによって、余剰時間を生産労働に当てる役割を果たした。

そのことは労働力を補充する効果があった。かもしれないが、それを受容した国民には

電化Ⅱ近代化Ⅱ民主化

という思想が背景にあった。

こうして考えると、一九六〇年代後半はまさに戦後日本における最初の「ベンチャーの時代」であった。

次に挙げる人々のことは知らなくても、起業・創業した企業の名は、聞いたことがあるに違いない。

井深大（ソニー）

安藤百福（日清食品）

樫尾忠雄（カシオ計算機）

安井正義（ブラザー工業）

高原慶一郎（ユニ・チャーム）

森泰吉郎（森ビル）

松園尚巳（ヤクルト）

山科直治（バンダイ）

青井忠治（丸井）

飯田 亮（日本警備保障）

江副浩正（リクルート）

三島海雲（カルピス食品）

吉原信之（三陽商会）

山崎峯次郎（エスビー食品）

中内 功（ダイエー）

西川俊男（ユニー）

田口利八（西濃運輸）

本庄正則（伊藤園）

塚本幸一（ワコール）

伊藤傳三（伊藤ハム）

鈴木清一（ダスキン）

小倉昌男（ヤマト運輸）

市村 清（リコー）

河合小市（河合楽器製作所）

三澤千代治（ミサワホーム）

水島廣雄（そごう）

江崎利一（江崎グリコ）

この時期に情報サービス会社やソフトウェア会社を興した人々も、この中に含まれるべきであるに違いない。

二

ベンチャーの時代を築いた人々の小列伝を書く。

まず、画期的な技術の発明、ユニークな製品で身を立てた人々がいる。順不同で書くが、年長者には敬意を払わなければなるまい。

三島海雲（みしま・かいうん）

一八七八年（明治十二）大阪府に生まれ、九九年京都西本願寺文学寮を出て西本願寺系中学の英語教師を一年間勤

めた。東京仏教大学に入り、一九〇二年中国に渡り、蒙古に足を伸ばした。

このとき蒙古族が飲用していた「すっぱい乳のクリーム」が栄養食品であることを知り、帰国してその普及啓蒙に努め、一七年「ラクトー」を設立した。はじめは「腐った牛乳を売っている」など悪評が立ったが、日本人に合うよう独自に味覚の改良を重ね、乳酸菌飲料「カルピス」を發明した。

「初恋の味」というキャッチフレーズが受け、都会のしやれた飲み物として中元など夏場の贈物として百貨店の定番商品となった。

戦後、社名を「カルピス食品工業」と改め、チーズ、バターなど酪農製品全般を扱った。日本人の食生活改善に貢献があった。六二年、保有するカルピスの全株式を売却して学術研究を助成する三島海雲記念財団を創立した。七四年没。享年九十六。

江崎利一（えざき・りいち）

一八八二年（明治十五）佐賀県に生まれ、尋常小学校を出て家業の薬種業に従事した。十九歳のとき父親が死去したため事業主となり、空き瓶を再利用してブドウ酒を販売したところ、これが爆発的に売れた。

一九二二年、有明海近くを行商の途中、カキの煮汁からグリコーゲンが採取できることを知り、グリコーゲン入りキャラメル「グリコ」を創製した。「一粒三百メートル」のキャッチフレーズと黄色い箱、試供品の配布、無人販売機、小さな玩具のオマケなどで売上げを伸ばし、三三年には酵素入りビスケツト「ビスコ」を製品化した。

第二次大戦の空襲で工場が焼失し、そのうえ新田への切り替えで資産の大半を失った。だけでなく公職追放の処分を受けた。すでに五十七歳でもあったことから、経済界は「再起はあるまい」と考えた。

ところが五一年に公職追放を解除されると「再建宣言」を発表、五五年に「一粒で二度おいしい」のキャッチフレーズで「アーモンズ・グリコ」を発売して再建に成功し、五八年「アーモンド・チョコレート」、六〇年「ワタタチ・カレー」などがヒットした。

「終生現役」を唱えたが、七三年に会長に引退した。松下幸之助と親交があり、二人で「文無しの会」をつくって晩年の楽しみとした。八〇年没。享年九十七。

山崎峯次郎 (やまざき びさ・みねじろう)

一九〇三年(明治三十六) 埼玉県に生まれ、渋谷家から山崎家の養子となった。一五年金杉村高等小学校を出で

東京・浅草のソース屋で店員として働き、このとき食べたカレーライスの味に衝撃を覚え、自らカレー粉を作ろうと二三年浅草に「日賀志屋」を開業した。

はじめカレー粉は醸成しなければできないことを知らず失敗の連続だった。三五年独自の製法を編み出し、東京・板橋に工場を建設した。戦時下で海軍の艦内食として制式採用されたが、戦災で工場を失い、戦後、再建して社名を「エスビー食品」に改めた。

家庭で簡単にカレーができる固形カレーで先駆け、さらにレトルトの即席カレーを製品化した。またコシヨウ、カラシ、ワサビなど各種スパイスを家庭に普及させる貢献をした。七四年五月会長に退き、同年十一月没。享年七十一。

伊藤傳三 (いとう・でんぞう)

一九〇八年(明治四十二) 三重県に生まれ、二三年富田尋常高等小学校を卒業して魚肉加工会社に勤めた。二八年大阪市北区深田町で「伊藤食品加工业」を創業し、三四年豚肉の裁屑と魚肉を混合し、セロファンで包装したスティック状の「セロ・ソーセージ」がヒットしたが、第二次大戦で事実上、事業閉鎖に追い込まれた。

四六年「伊藤食品工業」を再建し、独自の脱臭技術で鯨肉ハム、次いでニュージールランドから輸入した三千トンの

マトンの肉でプレスハムを製品化し、一般家庭で購入できない価格帯で発売した。

六一年社名を「伊藤ハム栄養食品」に改め、六四年に発売した「スキンス・ウインナー」などで国内ハム業界をリードし、コールドチェーンの確立などに貢献した。英連邦ニュージールランド政府から民間最高名誉勲章（OBE）を授章し、八一年没。享年七十二。

安藤百福（あんどう・ももふく）

一九一〇年（明治四十三）台湾に生まれ、幼時に両親を失った。日本の祖父に引き取られ、繊維問屋の跡とりとして育てられた。三四年立命館大学専門部経済科を卒業し、三六年「東洋メリヤス」を設立して事業家を志した。終戦とともに日本国籍を取得した。

四八年「中交総社」を設立して食品販売業に転進したが、大阪駅前の屋台のラーメンが受けているのを見て、「いつでも、どこでも、すぐに食べられるラーメンを作ろう」と即席ラーメンの開発に着手した。

五八年、池田市の自宅の庭に作ったトタン屋根の掘っ立て小屋で急速油熱乾燥法の実用化に成功し、世界初のインスタント・ラーメンを製品化した。翌五九年、社名を「日清食品」に改め、「チキンラーメン」を発売した。だが、

生の麺玉が六円で売られていた時代、一個三十五円の「チキンラーメン」は市場がなかなか受け入れなかった。

ところが大阪中央市場が正規取扱いに認定し、受験ブームと大がかりな公共事業によって「夜食」の需要が顕在化した。当初は一日三百食限定だったが、数か月後には六千食のオーダーが入り、積載を待つ配送トラックが工場を二重三重に取り囲んだほどだった。

松園尚巳（まつその・ひさみ）

一九二二年（大正十一年）長崎県に生まれ、四五年法政大学専門部を中退して長崎に戻り商家に従事した。代田稔が京大医学部時代に特殊乳酸桿菌の発見・育成に成功し「ヤクルト」と名づけ、これを登録商標にした。

代田はヤクルトの普及を願って製造・販売を希望する者に分け与えたため、全国にヤクルトを扱う業者が現われた。松園も長崎地区における一業者に過ぎなかったが、品質の均一化と価格の安定には全国組織が必要であることを全国のヤクルト業者を説いて回り、五六年「関東ヤクルト製造」を設立、六〇年「ヤクルト本社」を設立して社長に就任した。

女性販売による宅配システムで全国に販売網を展開し、一日一千二百万本を販売するまでに成長した。化粧品・薬

品事業にも進出、多角化を図った。

三

このまま書き進むと息が詰まるので、少し脇道に逸れる。第一分冊で筆者は明治・大正期の起業家のありようをわずかに描いた。最初に現われたのは政府の殖産興業・富国強兵策に結びついた政商たちだった。

彼らは造船所や紡績工場や鉱山といった官営事業所の払い下げを受けて、世界に類例を見ない「財閥」という経済機構を作った。岩崎弥太郎、浅野総一郎、川崎正蔵、古河市兵衛、洪澤栄一。

次に成金が登場した。日清・日露、第一次大戦の金偏景気、糸偏景気、海運景気、木材景気、それに株の売買が巨万の富を特定の何人かにもたらした。内田信也、金子直吉、久原房之助、鮎原義介、白石元治郎、鈴木久五郎。

三番手に登場したのは、政治や戦争とかかわりのないところから、ほとんど自力で成り上がった人たちだった。森村市左衛門、森村開作、御木本幸吉、服部金太郎、黒澤貞次郎、田中啓次郎、岩垂邦彦、田中久重、吉崎牙太郎、三吉正一。

こうした人々が起こした事業は、多くが政府や産業のた

めにあつた。鉱工業、鉄鋼業、造船業、紡績業、海運業、通信機械、窯業、事務機械、運送業、動力機械、電力業、金融業などは、結果としては庶民の生活を潤したが、事業そのものは庶民の生活と結びついていなかった。

第二次大戦のあとに登場した起業家たちは、その点において決定的な違いがあつた。まず、前記六人のように、食品を工業化するようなことがなかった。「食べる」という最も根源的かつ庶民の日常生活にと直結する産業が、この人々によつて始まつた。

前記の六人は、日本人の食生活を変えた。

幕末維新から明治・大正にかけて、なるほど日本人の食生活は大きく変化した。それまで多くが食さなかつた牛肉や豚肉が市場に提供され、すき焼き、牛丼、ピフテキ、豚カツ、コロツケなどが食生活の一部に入ってきた。

それは和洋混淆、和洋折衷のプロセスを経て日本流にアレンジされたものであつて、砂糖と醤油、味噌、味醂などで味付けが成された。コロツケは本場フランスのそれとは大いに異なる。

牛乳、チーズ、クリームといった乳製品も同様だった。

チーズは奈良に平城京が置かれていた天平の時代、唐の国から——実際は渡来して佐保山のあたりに居住したベルシアやアラブの商隊がもたらし、「醍醐」という倭名が付け

られた。

当時の宮廷では珍味としてそこそこ評判がよかつたらしい。殺生は罪業であるという仏教の教えが、その普及を阻んだ。明治・大正期に乳製品は洋風を好む一部の日本人がかなり無理をして食したが、大衆は敢えて手を出さずとすなかつた。

肉の調理方法が日本流にアレンジされ、乳製品が嫌われたのには理由がある。どうやらそれは腸の中の酵素の働きというものであるらしい。日本人は長く獣肉を食さなかつたために消化することができなかつた。筆者の子どものときでさえ、牛乳を飲むと腹を下すことがままあつた。

ために二百五十グラムのステークに挑んでも、半分を超えないうちに

——もう結構。

ということになる。

こうした食生活が戦後、わずかずつだが着実に洋風化した。食べ物洋風化する中で育つた子どもたち、つまり団塊の世代以後の子どもたちの体内で、消化酵素がそれなりに洋風化した。さらに、親たちは自身の体験から、

——子どもにひもじい思いだけはさせたくない。

と考へた。さらに、

——大きく育つてほしい。

と願つた。

米欧人に比べ、背が低いことが日本人共通の劣等感だったから、魚より肉、水より牛乳を食べさせれば背が高くなるのではないか。そこで工業的に均一化され、価格が安定している洋風の食品が売れた。食品の工業化と民主化がかくして始まつた。

民主化とは、企業から見れば大量消費が始まつたことを意味している。カルピス、グリコ、ソーセイジ、カレー、インスタント・ラーメン、ヤクルトなどは、その象徴でもあつた。むろん丸美屋の「ふりかけ」、ロッテのチョコレート、渡辺製菓のインスタント・ジュースや「オモチも入つてベタベタと」のお汁粉の素なども、その中に含まれる。

ミンシというものが戦後の庶民の生活に占める役割は、家庭用電化製品と同じように大きかつた。それは人口の半分を占める女性の開放をも意味していた。

平塚らいてうが「女性は太陽」と謳い、与謝野晶子が「きみ死にたまふことなかれ」と詠んだ時代、それでも圧倒的多数の女性は「家」に縛られた。ここでいう「家」とは、家父長制にもとづく精神的、思想的な意味での「家」であるとは限らない。むしろ「家事」と言い換えたほうが分かりやすい。

家事とは何であるか。

炊事、洗濯、掃除、裁縫、育児・教育。

実際、筆者が子どもだったころの母親の日常は、朝六時前に起きて米を研ぎ、湯を沸かし、味噌汁を作り、夫と子どもの身支度を整え、夫と子どもたちを送り出す。その後、食器を洗い、洗濯をし、部屋を掃き、板の間を拭き、一息つくかつかぬかで裁縫を始め、あるいは毛糸を編む。

昼食を残り物とお茶漬けで済ませるとその日の夕食のための買い物に出かけ、戻ると物干しから衣類を外し、たまたみ、箆筒に納め、再び針と糸の作業に取りかかっているうち、学校から子どもたちが帰ってくる、という毎日だった。

このうち米を炊くという作業は炊飯器がやってくれるようになった。洗濯石鹸と洗濯板でゴシゴシ洗っていた仕事は粉石鹸と洗濯機の仕事になった。ラジオを聴きながら裁縫をするのが主婦の楽しみになった。

既成の衣料品は店で売られていたが、庶民の日常に入り込むには高価だった。そこで多くの主婦は布を買って裁断し、縫い合わせて子どもに着せた。

ミシンは主婦の憧れの機械だった。

横に長い小さな台に複雑な形状をしたミシンが固定されていて、椅子に座って足で踏み板を踏む。するとその動力がベルトでミシンの弾み車に伝えられ、ギアとカムが動き、糸を仕込んだ針と下糸の滑車が動く。

布を送り出す歯切りが前後し、よほど凝った衣服でない限り、見栄えを問わなければほとんどを家庭で作ることができた。

カシオの電卓は別として、ソニーのラジオ、バンダイの玩具、フランスベッドの折りたたみベッドやソファ、ユニ・チャームの女性用衛生用品、ワコールの女性用下着などは、女性のための産業、女性が支えた産業だった。家そのものが女性の「城」であったために、ミサワホームは女性の支持なしでは成立し得なかった。

本物のハムはまだ高価だったので、魚肉でできたソーセージを主婦が購入した。たまには「お肉」の入ったカレーを子どもたちに食べさせたいと考えた主婦が、SBのカレー粉を買った。どうせ与えるなら「一粒三百メートル」のグリコのキャラメル、胃腸にいいので毎朝一本のヤクルト、夏の贈答にカルピスの詰め合わせが売れた。

すべて女性に主導権があった。

前述の起業家たちは、個々に見れば時流という幸運に恵まれただけのように見える。おそらく個々にインタビューすることができれば、彼らは一様に

——たまたまですよ。運がよかったです。

と答えるであろう。

だが、実はそうではなかった。彼らは「変えよう」とい

う意志を持つて事業に挑んだ。

「変えよう」という意志が世の中を変えた。
産業が意志を持った。

補注

加藤秀俊 かとう・ひでとし / 1930 東京に生まれ五三年東京商科大学(現・一橋大学)を出て京都大学人文科学研究所に入った。ハーバード大学、シカゴ大学に学び、アイオワ大学、ケント大学の客員教授を経て京大助教となった。六九年の大学紛争のとき京大を辞しハワイ大学教授、のち学習院大学教授、放送大学教授。七〇年コミュニケーション・デザイン研究所を創設し所長に就任した。

中間文化論 加藤秀俊が唱えた社会学論で、日本の文化・社会の構造は第二次大戦後にいたって一定水準以上の学歴と知識を持つ大衆に担われ、政治・経済・社会のあらゆる領域が中流階級意識を志向したとする。

社会的流動性 経済社会は、生産、加工、再生産という経済プロセスを基盤に、発生、改良、発展、安定、停滞、低迷、新秩序の再構築という七段階をたどる。生産と加工に必要な資源(ヒト、モノ、カネ)はそれぞれの段階に応じて流動するが、発生期の資源流動は放任的競争主義(弱肉強食)によって無秩序に行われ、改良期に一定の枠組みができ、発展期にいたって指向性すなわち秩序を持つ。安定期から低迷・停滞期には流動性が低下し、再構築期に入ると流動性が高まる。それが再び無秩序に戻るか一定の指向性を獲得するかは、社会基盤の弾力性と資源の蓄積量によってその後の再生速度が左右される。

日本史上、経済社会が破壊的な混乱状況を呈したのは戦国時代、幕末維新期、日中・太平洋戦中・戦後期の三回が記録され、①既

存社会を支えた思想や権威の全否定②新しい価値観と社会制度の創出③国際化の進展という三つの共通点を持っている。生産、加工、再生産のプロセスを見たとき①②③のファクターは相互に影響し合い、唯一の決定的な誘因とはなり得ない。戦国時代だけが新秩序の再構築に長い時間を要したのは、にわかに流動性を増した社会資源を吸収する弾力性に乏しかったためである。より分かりやすいと、十五後半から十六世紀にかけては地球規模で寒冷期にあつて、日本でも淀川が凍結して舟の往来ができなかつたとか、六道湖が凍つてその上を人が歩いたというような記録が残っている。

農業への依存度が高かつたために気候変動がただちに社会経済に強く影響し、例えば三好一族は京都を支配しても政治権力を掌握できなかつた。また、こんにちでいえば機甲師団に相当する騎馬軍団を率いた武田氏が軍事行動を起こすことができたのは農閑期に限られ、長期にわたる作戦を実行できなかった。このため一度破壊した社会秩序を再構築することができないまま短時間で再び無秩序な流動性に回帰し、混乱が長く続いた。

戦国時代の諸相 一般に日本の戦国時代は応仁の乱に始まるとされる。下位の者が上位の者を滅ぼす「下克上」がその象徴的な現象だが、それを促したのは社会構造の硬直化と形骸化にあつた。

日本の戦国時代は九世紀以来の貴族階級を支えた荘園制度と浄土思想の崩壊に始まり、土地と人民を支配する新しい政治体系の創出と確立をめぐる過渡的な時期と定義することができるとの間、一向宗徒による共産主義的共同運命体や商業資本による自由経済圏、海上交易国家の形成といった試みがなされ、ヨーロッパにおけるルネッサンスと軌を一にする部分も少なくない。

鉄砲・貨幣・土地 鉄砲を使いこなして成り上がったのは織田信長、貨幣を手中に納めたのは豊臣秀吉、土地を政治化したのは徳川家康である。ポルトガル人宣教師が種子島にもたらした鉄砲は、当初は製法が秘匿され高価で数が少なかったこともあつて有用な武器としては認識されなかった。合戦で戦略的かつ組織的に使用した最初是小田原に本拠を置いた後北條氏三代氏康だとされる。天文十五年（一五四六）の四月、北條氏康は古河公方・足利晴氏、山内上杉憲政、扇谷上杉朝定が率いる八万の軍をわずか八千の手勢で破った。織田信長は北條氏康の戦法にヒントを得るとともに堺の鍛冶職集団・国友氏を抑えて鉄砲と硝薬を大量に製造させ、これを足輕に持たせて甲州・武田騎馬軍団を破った。

豊臣秀吉は戦国乱世に終止符を打つべく刀狩や検地を行ったが、その両施策とも小田原北條氏の政令を真似たものであつて、彼の権力の根源は度量衡の掌握と貨幣制度にあつた。関所の撤廃や楽市楽座を敢行したばかりでなく、秤量貨幣を鑄造した。金貨には桐の極印を捺し、銀貨には大黒天の極印を打刻することで重量と品位を保証している。政権掌握者による統一的な貨幣制度への出発点を形成したところに秀吉の意義が見いだされる。

一方、徳川家康は諸大名の領地を「石高」という経済指標に変換することで荘園制度以来の土地私有（特定地域の支配）基盤を崩壊せしめ、大名を移封する政策をとった。上杉氏を越後から会津に、次いで米沢に移したように、有力な大名の地縁関係を絶ち、あるいは廃絶して政権基盤を高めた。

長瀬富郎 ながせ・とみろう／1963～1911。美濃国（岐阜県）恵那に生まれ、十一歳のとき雜貨商「若松屋」の丁稚となつた。一八八五年東京に出て商人として自立を目指したが米相場

で失敗し挫折、八七年に西洋雜貨商「長瀬商店」を開いた。扱ひ商品である輸入石鹼に注目したのは、輸入品は品質がいいが高価、国産品は安いが粗悪で、安くて品質が輸入品並なら売れると考えたためだった。石鹼職人・村田亀太郎、薬剤師・瀬戸末吉、医師・永坂石埭の三人と高純度で肌を荒らすことがなく、香り高い製品の開発に着手し、九〇年「花王石鹼」を発売した。三個人入り化粧箱が三十五銭と輸入品の三分の一だったことから贈答用として重宝がられた。特約店制度やポリウムディスプレイメント制を導入するとともに鉄道の駅に広告看板を立て、景品制度やキヤンペーンなどを展開して事業を拡大した。一九〇〇年化粧水「二八水」を発売して化粧品分野に進出、一〇年長瀬商店を合資会社長瀬商會に改組するとともに「八八幸運ナラザレバ非常ノ立身ハ至難ト知ルベシ、運ハ即チ天祐ナリ、天祐ハ常ニ道ヲ正シテ待ツベシ」の社是を定めた。

佐々木八十八 ささき・やそはち／1874～1957。京都府に生まれ、一九〇二年大阪で織維雜貨商「佐々木営業部」を創業した。メリヤス製品の卸売りを中心に事業を伸ばし二三年「レナウン」をブランドとすることを決定した。二六年「レナウン・メリヤス工業」を設立して織維製品加工に乗り出し三八年株式会社に改組した。戦時中は事業を中止したため四七年改めて株式会社佐々木営業部を興し、五一年生産部門を「レナウン工業」に、五五年販売部門を「レナウン商事」にそれぞれ改称、五六年に全国主要都市に直系販社を設立した。

レナウン娘 最初正式なタイトルはなかったが、多くの人に親しまれたため「わんさか娘」という名が付けられた。

♪ドライブウェイに春が来りゃ

(イエイエイエイエイエイ、イエイエイエイエイ)
 プールサイドに夏が来りや

(イエイエイエイエイイ、イエイエイエイイ)

で始まるこの歌は、イメー・アニメーションとの組み合わせという意味でテレビコマースヤル史においても画期をなす。レナウンの宣伝部に勤めていた川村みずえが、作曲家志望だった実兄の小林亜星に話を持ちかけ、亜星がわずか十分で曲を作ったという伝説がある。

松下幸之助 まつした・こうのすけ／1894～1989。和歌山県に生まれ一九一〇年大阪電燈(のちの関西電力の前身)の見習いとなり一七年に二股ソケットを考案して独立した。二三年自転車用電池ランプを發明して事業の基盤を作った。三五年松下電器器具製作所を「松下電器産業」に改称したが太平洋戦争中に軍需産業だったことを咎められ戦後に公職追放となった。四七年追放解除となって以後、炊飯器、洗濯機、テレビ受像機、冷蔵庫など家庭用電化製品で成長し「ナショナル」ブランドを確固たるものにした。

海軍の艦内食 一度に大量の食事を作ることができ、短時間で食することができる。かつ皿一枚とスプーン一本で済む簡便性から帝国海軍の艦内食としてカレーライスが制式採用された。横須賀市が町おこしに「海軍カレー」を目玉にしているが、正しくはS B食品のカレー粉を使ってこそ、ということになる。

セロ・ソーセージ 当初は一本三十七・五グラムだった。この商品は現在も「ポールソーセージ」という名で販売され、月産三百万トンで消費されている。

醍醐 だいがい・仏教の涅槃経に「牛より乳を出し、乳より酪を出

し、酪より生蘇を出し、生蘇より熟蘇を出すが如し。醍醐最上なり」とある。酪は練乳、蘇はバターないしヨーグルト、醍醐はチーズであろう。文献で確認できる範囲では、七世紀後半にペルシア人商隊の居住区が現在の唐招提寺近くに形成されており、彼らが「酪」「蘇」「醍醐」をもたらしたことは疑いを得ない。奈良・天平以後、チーズの食文化は失われたが「醍醐味」という言葉が残っている。

日本IT書紀 133 ベンチャー列伝

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。